男女共同参画社会をめざす情報誌

PONO 2

ポノ・ポノ

2009.3 発行　浦安市 市長公室 企画政策課 人権・男女共同参画班
〒279−8501　浦安市猫実1-1-1　TEL 047（351）1111
編集：「ポノ・ポノ」vol.13 編集会議・市民編集員

vol.13

特集　「なりたい私」になるために

心の中に「なりたい私」は、いますか。

「1年後は、再就職していたい」「10年後は、○○○をしていたい」など、性別、年齢にかかわらず、誰もが「なりたい私」になっていいはず。でも、日々の忙しさで忘れてしまったり、さまざまな事情であきらめてはいませんか。

「なりたい私」になるために、何をしたらよいのでしょうか。今号では、しがらみと葛藤しながらも、絵本を出版する夢を実現した、映画『ミス・ポター』の主人公に注目し、その生き方をさまざまな角度から考えてみました。後半では、好きなことを仕事にした方にインタビュー、そこには「なりたい私」になるためのヒントが隠されていました。

映画『ミス・ポター』に見る「なりたい私」

私に道を選ばせて

――人生を切り拓いた意志の力

映画の中には「なりたい私」を実現した素晴らしい人生があふれています。
今回ポノ・ポノでは『ミス・ポター』の実在の主人公、ビアトリクス・ポターの人生にスポットを当てました。数々の名シーンの中から、とくに印象的だったセリフを紹介します。

ミス・ポター
（2006・米）

CAST：レニー・ゼルウィガー／ユアン・マクレガー／エミリー・ワトソン

【STORY】
ピーター・ラビットの生みの親、ビアトリクス・ポターの伝記映画。1900年代初頭・ヴィクトリア朝の英国。上流階級の女性が仕事を持つなどありえない時代に、ビアトリクスは自分の絵本を出版する夢を実現する。やがて彼女は担当編集者と恋に落ちるが、彼との結婚に家族は猛反対。両親の出す条件に従ってひと夏を彼と離れて過ごしたまま、彼が急逝してしまう。失意の中、ビアトリクスは再び自らの道を選択する。絵本の出版で莫大な財産を得ていた彼女は、恵まれた生家を出て自立することを決意。その後も、財産をナショナルトラスト運動にあてるなど、芯の通った生き方を貫いていくのだった。

SCENE 1　「アーチストが印刷所に行くのは当然のことよ」

良家の子女が男だらけの印刷所に足を運んで意見するなどありえなかった時代に「あなたの立会いのもとで色を決めたい」という編集者の言葉に後押しされて、アーチスト（作家）としての自分に目覚めたひとこと。自分で出版社に絵本を売り込みに行くパワーもすごい！

SCENE 2　「お前はもう子どもじゃない、アーチストだ。（中略）お前は私の誇りだ」

かつて画家になる夢をあきらめた父が、絵本作家としてスタートした娘をただの「私の娘」ではなく「個」として認めた場面。傍目には才能に恵まれて見える人でも、人生の選択を前にして自分を信じるのは案外難しいこと。そんなとき自分を認めてくれる人の存在は大きい。

SCENE 3　「私は本の出版で自立できる」

経済力が自立の全てではないけど、経済的な自立を果たすことで、自分の意志を貫き通す心が強くなっていったのでは。

SCENE 4　「私に道を選ばせて（I must make my own way.）」

恋人を失ったあと、家を出る決心をしたミス・ポターが、引き止める父を前に言ったセリフ。離ればなれのまま彼を失ってしまったことを彼女は後悔して、まだどこかで「殻」を破れずにいた自分に気がついた。「I must」という言葉に、そうできずにいたけれど、今度こそわたしはそうしないと生きていけないの、という切実な強い意志を感じる。

SCENE 5　「お説教なら私は聞き飽きています。幸い今の私は他人の許しなど必要としない身分です」

開発業者から農地を守るためオークションで競り落とした際「土地の価値もわからないくせに」というようないやみを言った男に、ミス・ポターが言い返した言葉。自分の意志で自分のことを決められる立場だということが、彼女を精神的にも自立させている。

SCENE 6　「私はここに来た。心の故郷に」

幼い頃夏を過ごした湖水地方（彼女にとっての創作の原点）に移り住み、美しい田園風景の中で作家活動を続けるミス・ポター。最後のこの言葉は「こうしたい」「こうなりたい」と強く思い、自分の人生を自分に正直に、一歩一歩丁寧に進んでいけば、自分にとって一番いいところにたどり着けるんだよという、彼女からわたし達へのメッセージ！

ポノ・ポノより

身分や性別による制限が多い時代を生きながらも、つねに自分が「こうしたい」と思うように行動して道を切り拓いたミス・ポター。

100年以上たった今、わたし達は何かにチャレンジしようとするとき、「〜が〜してくれない」「〜だから〜できない」と、自らもハードルを立てていないでしょうか。

何かを成し遂げようとする自分自身の強い意志が、周囲の理解にもつながることを、ミス・ポターは体現してくれました。「〜してくれない」から「こうしたい」へ。わたし達も、心の転換をして進んでいきたいですね。

うらやすNOW

URAYASU KATSUDO ユーカツ

浦安市では、今年度新たに「U活＝浦安活動」という、シニア世代地域活動モデル事業を始めました。市民活動推進課の方に、その取り組みについてお話をうかがいました。

「U活」とは、団塊世代を含め、これから定年を迎える方々や、すでに退職をされた方々が地域に戻り、社会で培った豊かな経験、知識を地域活動や市民活動に活かしてもらうきっかけづくりのための事業です。「U」には、「浦安」のほか「you＝あなた」「結う＝つながる」「遊＝楽しむ」という意味合いもこめられています。

第二ステージも生きがいを持って、充実した生活が送れるように、地域デビューの背中を押すようなイベントを行っていくつもりです。昨年十一月に開催した「U活フェア」では、市民活動団体や公民館サークルが一堂に会し、参加者の皆さんに活動をアピールしました。

現在の課題として、情報をいかに、シニア世代の方に伝えるかがあります。今年の一月に「U活ネット」というサイトを立ち上げ、活躍する場を求めている個人と、必要な人材を求めている市民活動団体双方の出会いの場が持てればと考えています。さらに「U活ニュース」を発行し、多くの市民の皆様にこの活動をご理解いただけるよう取り組んで行くつもりです。

地域の活動では、圧倒的に女性の参加が多いようです。この事業を通じて、もっと男性が地域に活躍の場を見つけ、仲間をつくり、楽しく活きいきと生活できるための場づくりのお手伝いをしたいと考えています。

いま浦安の

すてきな人

共通の趣味は合唱という海宝さん夫妻。
地域の仲間と合唱を続ける楽しさやその魅力についてお話をうかがいました。

海宝守一さん
みどりさん

地域の仲間とつくるハーモニー

「ふたりとも学生時代から合唱をやっていたんですよ」。そう話す守一さんとみどりさんは、就職してすぐに同じ職場の合唱団で知り合い結婚しました。「一緒に合唱団で歌っていたんですが、3年くらいして子どもができて、ふたりとも仕事と育児の忙しさから続けられなくなりましてね」と守一さん。共稼ぎで3人の子育てに奮闘している間、しばらく合唱を離れます。その後、東京都内から守一さんが生まれ育った浦安に越してきて、末の子も小学校にあがり、時間にも少しずつ余裕ができたふたりは、それぞれの形で合唱を再開します。

守一さんは知人に誘われ浦安男性合唱団に入団し、現在トップテノールを担当。精力的に活動を続けています。混声合唱では主旋律は、女性のソプラノが歌うことが多いのですが、男性合唱ではトップテノールが担当することが多いそうです。「トップテノールは、主旋律のメロディーを朗々と歌えるのが魅力。目立ちたがり屋が多いんですよ（笑）」。一方、みどりさんは浦安市の定期市民演奏会に第10回公演から参加しています。「オーケストラをバックに第九などを歌うのですが、これまで毎回欠かさず参加しています」。また、昨年は知人が活動する合唱団がハンガリーへ演奏旅行に行くのに夫婦で参加するなど、機会があれば一緒に活動することもあります。

コーラスの中に自分の声が溶け込みハーモニーがぴったりと合ったときの喜びを、守一さんは「爽快な、至福の気分」、みどりさんは「ぞくぞくっと鳥肌が立つような最高の気持ち」と表現してくれました。浦安で合唱を続ける中でさまざまな職業や年齢の友人がたくさんできたと言います。「地域の中で近所の仲間と一緒につくるハーモニー。音楽的な部分だけではなくて、ご近所の付き合いでも大事な場だと思っています」と守一さんが言うと、「そう、家族ぐるみでお付き合いしますので、それがまた楽しいですし、地域で活動するよさですね」とみどりさんが続けます。

守一さんが家のピアノで音とりをしながら練習していると、みどりさんが「そこ、違うんじゃないの」とコメントすることも。「ほんとうに違っているから言われても仕方ないですよ」と守一さんは照れくさそうに笑います。「でも、好きな音楽のジャンルが同じというのは助かります。聴いていても、うるさいと思いませんからね（笑）」とみどりさん。活動のスタイルはそれぞれですが、合唱という共通の趣味で繋がったふたりは、その喜びや楽しみも共有しているようです。

編集に携わって

この冊子は「ポノ・ポノ」vol.13編集会議の市民編集員がつくりました。

内山京子：ハードルは、高くても低くても飛び越すことで変化が生まれるって信じたい。「ハードルを　越してみようよ　一歩ずつ」。
川村求可：「20歳で野球選手、50歳でお医者さん、70歳でお寿司屋さん、90歳で絵本屋さんになる！」5歳の息子の夢。いいぞ！
伯野朋絵：目の前のハードルに気づかないふりをしたり、時には蹴り倒したり…。それでも、また現れるハードル！ どうする!?
山口晶子：私のポノ・ポノ方程式。
①小さな勇気＋出会い＝意外な自分を発見！
②楽しい×がんばる＝やりがい！
①×②＝幸せ×幸せ!!

「ポノ・ポノ」の意味　ハワイ語の「PONO」（意味は、正しさ、幸福、繁栄など）に由来します。2つ並べて「ポノ・ポノ」と声に出してみたときの響きが親しみやすいでしょう!?

INTERVIEW

自宅で本格料理教室を開く
柏谷裕子さん（57歳 東野在住）

48歳のチャレンジ！
夢だった料理のプロに

48歳のとき、料理専門学校に入学。3年間学び、卒業後は、ホテルのレストランに就職。調理師免許取得後、自宅で料理教室を開く柏谷さんにお話をうかがいました。

主婦生活から一念発起して、有名料理専門学校入学

実は、息子のひきこもりがきっかけでした。息子あてに専門学校の案内が毎日のように届いてね。その案内のひとつに目がとまり、料理のプロになりたかった夢を思い出しました。「私の夢を追いかけてみよう！」って、入学を決心。入学して半年くらいで、息子はひとりで就職を決めてきたの。一緒に落ち込んでも仕方がなかったってことですかね。

講義に、実習に、ハードだった3年間の学生生活

日本料理、西洋料理、製菓をそれぞれ1年間学びました。授業はいきなり、フランス語、ドイツ語、その上、覚えることは山のようにあって…本当に大変でした。周りは、料理店の跡継ぎなど、経営を目指して学ぶ若者ばかり、40代はわたしだけ。目の前のことに必死で取り組み、最優秀で卒業できました。息子と同世代のたくさんの友達、その道のプロである素晴らしい先生にめぐり会え、充実した学生生活でした。

学園祭でクラスメートとつくった製菓

卒業後はホテルのレストランへ就職。そして料理教室開講へ

50歳を過ぎてましたけど、学校で学んだので、プロとしての自信があったんです。ホテルのレストランの料理長に「フランス語での指示もわかります」って直談判して、すぐに働き始めました。実地経験を積んで、調理師免許を取得後、「文化の香りも添えて料理を伝えたい」と、自宅で料理教室を開いて5年目です。

いつも見守ってくれる家族

入学を決めたとき、夫の反対はなかったけど「いつまで続くか」と思っていたかも。それでも、真剣さは伝わったんでしょう。何も言わずに見守ってくれていました。今では、料理教室前のそうじや足りない材料の買い物をしてくれたりします。無口な息子は、友達にわたしのことを「がんばりやさん」と紹介してくれて、うれしかったな。

「なりたい私」になるために…メッセージ

まずは自分が変わること。目標をはっきりさせること。決してあきらめない。わたしの場合は、おいしくてすてきな料理を教えたら、みんなの家庭がしあわせになるという信念があったから、続けられた気がします。

自宅での料理教室（現在）

よくある話!?

「なりたい私」を阻むハードル

仕事を通して「なりたい私」を実現しようとするとき、さまざまな問題にぶつかる人も多いでしょう。
それは、性別の壁であったり、家庭とのバランスであったり…。
ここでは、そんな事例をいくつか挙げてみました。
あなたも、心当たりがありませんか。

- 転職したかったが、妻に「家族がいるのに無責任」「子ども達が独立するまで待てないの」と言われ断念。
- 働きたいと言ったときの夫の言葉。「子どもの面倒誰が見るんだよ」「家族に迷惑かけないならいいけど、お前に家事との両立は無理じゃない？」
- 外に出て何かしたいとは思うけど、子どもがまだ小さいからかわいそうかしら。母親としての責任もあるし…。
- 女性社員でも転勤の多い会社に勤めていたが、結婚を機に夫に「転勤なんて無理に決まってる。他の仕事でもいいだろう」と言われ、辞めざるを得なくなった。
- 進路を決める際、親に「男なんだから大学くらい出ておきなさい」と言われた。
- 将来独立するのが夢で、土日は本当は資格を取るため勉強したいのに、休日くらいは家族サービスしてくれと言われる。
- 専業主婦歴10年。そろそろ働きたいけど「わたしの年齢では雇ってもらえないんじゃないか」「家事と両立できるだろうか」「長く仕事を離れていたから今さら無理なのでは」と不安が山積みで、どうしても一歩が踏み出せない。
- 念願かなって働きに出たものの、夫は仕事が忙しいからと家事、育児で協力してくれず、無理が重なって結局長く続けられなかった。